

## P-060

## 病児の「つよみ」の捉えに関する探索的検討：病弱特別支援学校の中学校部の教師を対象に

堀田 千絵<sup>1)</sup>、吉岡 尚孝<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>京都市立芸術大学、<sup>2)</sup>関西福祉科学大学

【目的】病児を対象とした先行研究の多くは、心理社会的問題を抱えるリスクの高さに着目してきた。一方で病児の「つよみ」にも着眼する必要があるが、その知見の蓄積は乏しい。そこで本研究は、病児の「つよみ」をどのように捉えているか、昨年度の小学部における結果（堀田・吉岡, 2024）を踏まえ、病弱特別支援学校中学部担当教員を対象とした質問紙調査によって探索的に明らかにすることとする。【方法】所属大学における倫理委員会承認を得たうえで、調査対象者には調査目的と公表の同意を得て調査対象者の属性と生徒の「つよみ」を自由に記述するように求めた。北海道から沖縄県における全国の病弱特別支援学校の校長宛に郵送し中学部担当教員で協力可能な教師に依頼をした。回答後に同封した封筒にて返信を求めた。【結果】有効回答者は63名（20代～60代）であった。自由記述についてKJ法を活用した。中学部教師が捉える病児の「つよみ」は以下に分類することができた。最も多いのは、第1に、「困難があっても乗り越えること」、第2に、「毎日学校に来ること」、第3に、「生徒がありのまま欲求や思いを出せること」、第4に、「現状を受け入れること」、第5に、「好きな活動に思う存分取り組むこと」、第6に、「心配かけまいと弱音を吐かずに立ち向かうこと」であった。【考察】先行研究（堀田・吉岡, 2024）において、小学部担当教員は病児の「つよみ」を、児童がありのまま欲求や思いを出す、好きな活動に思う存分取り組むこと、心配をかけまいと弱音を言わずに我慢すること、事実を受け止め困難があっても乗り越えるとしてとらえており、約9割の教師が後2者の治療のつらさを我慢し迷惑をかけまいとする姿を病児の「つよみ」と捉える傾向にあった。しかし、中学部の教師はこうしたつらさを我慢することを強みと考える割合は約4割に減り、「毎日学校に来ること」や「生徒がありのままの姿を出すことができること」を「つよみ」と考える割合が増えることがわかった。我慢しなくともいい場、時間や状況を保障することが教育においては重要な役割であり（e.g., 副島, 2021）、そうした着眼は中学部において顕著に認められる。今後も高等部の実態について引き続き検討していくことが必要である。

## P-061

## 養護教諭に必要なフィジカルアセスメントに関する認識について～オンデマンド講話前後の調査結果より～

佐藤 伸子<sup>1)</sup>、葛西 敦子<sup>2)</sup>、山田 玲子<sup>3)</sup>、  
福田 博美<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>熊本大学 大学院教育学研究科、<sup>2)</sup>元弘前大学、

<sup>3)</sup>北海道教育大学、<sup>4)</sup>愛知教育大学

＜緒言＞<BR>養護教諭は日々子どもの保健管理の実践において臨床判断を繰り返しており、その基盤となっているのがフィジカルアセスメント（以下、FA）力である。筆者らはこれまでに、養護教諭が行うフィジカルイグザミネーション（観察技術）の実施状況や自信に違いがあることを報告してきた。研究目的は養護教諭のFA実践に関連する、必要なFAに関する認識を明らかにすることである<BR><研究方法><BR>2023年7月～8月にA地区で、養護教諭を対象にオンデマンド講話「学び直しのフィジカルアセスメント」を実施した。本研究の趣旨に同意の得られた養護教諭に、受講前・後に質問紙調査を行った。受講前の調査項目は、バイタルサイン（体温、脈拍、呼吸、血圧、意識）、顔色、瞳孔、SpO<sub>2</sub>等に関する「実施状況」、「観察技術への自信」、「観察結果の判断を対応に活かす自信」であった。受講後の調査項目は、講話内容で扱ったFA項目について「養護教諭に必要な項目か」、「養護教諭に必要でないFA項目とは」（31項目より複数選択）、「講話への感想」等であった。倫理的配慮については、文書等で研究の趣旨を説明した後、Google Formsで、各自で任意の記号を入力してもらい、回答を求めた。回答の入力・送信をもって協力への同意が得られたものと判断し、受講前・後の調査に回答した65人を分析対象とした。<BR><結果と考察><BR>オンデマンド講話で扱ったFA項目について、「必要なない項目は無かった」と回答した養護教諭が41.5%であった。しかし、58.5%の養護教諭が「必要なない項目があった」と回答した。養護教諭に必要なない項目として、19項目が選択されていた。また約2割の養護教諭が、呼吸音（聴診器）、心音（聴診器）、腸蠕動音（聴診器）、ブルジンスキーウィーク、ケルニッヒウィーク、胸部音響振盪を選択していた。必要なFA項目については、養護教諭間で認識の差があることが明らかとなった。<BR>詳細は当日発表する。本研究は、JPSS科研費 JP23K25672およびJP22K10954の助成を受け実施したものである。